

助け舟

本荘手前で足止めされていた一行の近くの港に、たまたま一艘の七百石積の和船金剛丸が停泊していました。船頭は加賀の国小松の文蔵というもので、彼が篤実で義侠心にあふれる東本願寺の門徒であったことが一行に幸いました。文蔵は現如上人の苦難を聞き、積み荷を全部下ろし、一行を北海道まで送り届けることを決意します。一同は地獄で仏に会ったように喜び、船に乗り込みます。金剛丸は三日間走り続け、渡島半島の山々がわずかに見え始めたころ、にわか台風が接近し、バケツをひっくり返したような大雨と山のような高波が船を襲い、幾度となく転覆しかけました。この間、現如上人が声高らかに「正信偈」を唱えていたというのが、いかにもこの集団の性格を反映しています。結局北海道を目前にして、船は津軽半島の付け根に位置する深浦の港に退避します。さらに長旅の疲れの上のこの災難で、一行の泉竜寺祐之老が倒れ、まもなく亡くなりました。

北海道上陸

一行の苦難を聞き、函館に着任していた北海道開拓使の東久世通禧長官は、福岡藩と交渉し、福岡藩所有の軍艦環瀛丸を派遣させ、青森港に一行を迎えに行きました。一行が無事函館に着いたのは、2月に京都を出発してから5か月が経過した7月7日のことでした。浜辺には数千人の老若男女が集まり、称名念仏の中あたたく一行を迎え入れました(図2)。さらに、函館から陸路で約2週間かけて札幌に到着。明治政府より下賜された南7条西8丁目にお寺を建立します。ここには今も真宗大谷派東本願寺別院がたっています(図3)。

参考資料

東本願寺北海道開教百年史 真宗大谷派北海道教務所

現如上人―その生涯と北海道開拓― 真宗大谷派札幌別院

星霜1北海道史1889-1909 北海道新聞社

バックナンバーお届けいたします。ご希望の方は販売所までお気軽にご連絡ください。ご自宅までお届けいたします。

【編集後記】 戦後70年

7月6日の北海道新聞タリより、各界の著名人に戦争体験や戦後日本の歩みについて思いを語っていたインタビュー企画「私の戦後70年」が連載中です。平岸も直接の被害こそ受けていませんが、様々な形で戦争の影響を受けています。この連載でもいざ「戦争編」として取り上げる予定ですが、平岸近郊の戦時中の思い出や戦争体験など、ご存知の方がいましたら、教えていただければ幸いです。歴史の意義は、過去の失敗を学び、同じ過ちを繰り返さないことにあります。戦争の記憶を風化させないためにも、協力お願いいたします。

執筆者：道新永田販売所営業主任 伴野卓磨

1977年室蘭市生まれ、登別市育ち。金沢大
理学学部地球学科博士課程(古生物学専攻)を
修了後、六花亭に入社。2011年より現職。

◆この連載は毎月1日・15日の北海道新聞朝刊に折り込みしています。

◇発行元◇

(有)北海道新聞永田販売所

〒062-0936

札幌市豊平区平岸6条13丁目7-18

TEL: 0120-128-348

TEL: 0120-128-358



図3. 真宗大谷派札幌別院



図2. 現如上人北海道巡錫錦絵
(函館中央図書館蔵)

76.5MHz
FM Radio Station **APPLE**
FMアップル(76.5MHz)にて
「平岸の歴史を訪ねて」放送中!
今月は7月16日(木)午前11時から